

令和7年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学 校 名	校 長 名
6	川崎市立藤崎小学校	上野 和美

学 校 教 育 目 標	今年度の重点目標				
○すすんで学び、よく考え表現する子 ○心豊かでやさしく思いやりのある子 ○心身ともに健康でたくましい子	1. 未知の状況に対応する力をつける	2. お互いの良さを認め合う	3. 心身の健康と安全を守る力をつける	4. 地域と共に歩む	5. 働き方改革の推進

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
未知の状況に対応する力をつける	友達と共に考え、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業を推進します	「一人一人を知的探求者へ～対話を対話で終わらせない授業づくりを目指して～」というテーマで、国語・算数・社会・理科を軸として研究を進めた。児童一人一人が問いをもち自力思考し、対話を通して知識や技能、思考力・表現力・判断力、を高めていくための授業が多くクラスで行われるようになってきている。またGIGA端末の利用により児童の表現の幅が広がり、学習ツールとして定着してきた。主体的で協働的な学びにより、すべての児童の資質能力を伸ばしていけるようさらに研究を深めていく必要がある。	・育成する資質能力を明確にし、学年をまたぐ系統性を意識した単元構想の確立 ・論点整理など、次期学習指導要領に関する情報を的確につかみ、それらを鑑みながらの授業改善 ・校内研究を通して、知的探究者の定義の明確化 ・校内研究を通して、対話から生まれる深い学びの明確化 ・探究活動につながる学習のDX化についての研究推進
	学んだことを自分の生活や学習に生かそうとする力を育くみます	総合的な学習を軸として、探求的な学習に主体的・協働的に取り組んだ。開校70周年を切り口にする学年が多く、児童の学びに対する教職員の意識も変化してきている	・各教科の資質能力を効果的に育成していくための教科横断的なカリキュラムの編成 ・見方、考え方を働かせ、探究課題について問題解決に当たることができるような総合的な学習のカリキュラムの構築
	問いを見出し、見方・考え方を働かせ問題解決する力を育みます	予測困難な時代に対応していくために、一人一人の職員が社会情勢や教育の変革に対し高い意識をもちながら教育活動に当たることが重要であると考えた。全クラスの授業が変わることを目指して来年度も取り組む。個別最適な学びについては、これからの大きな課題である。指導要領が掲げる理念の理解と、指導の実際について研修を重ねていきたい。放課後の学習支援については毎週月曜日の放課後に行うこととし、全学年の時程を5時間までとした。一定の成果は上がっているが、支援の必要な児童に十分いきわたらず、改善の余地はある。初任者研修の充実や若手中心の研修会などOJTは機能している。	・習得し・何がわかり何ができるようになったのかを児童が認識し、それらを他の教科や日常生活に生かせる授業改善 ・知識技能を活用し、見方・考え方を働かせながら問題解決していけるような単元構想の確立 ・全ての児童が主体的に取り組み、対話を通して問題解決する力を伸ばす授業改善 ・個別最適な学びと対話的な学びを推進していくための授業改善 ・放課後支援等、児童の学びに合わせた支援の充実 ・OJTの更なる推進

お互いの良さを認め合う	全職員がいじめが絶対許さない姿勢で教育活動にあたります	・いじめ基本方針に沿った教育活動の実践 ・共生共育、効果測定、学校生活アンケートの推進 ・SOSの出し方についての指導の推進	アンケートや効果測定など、児童理解に努めることができた。いじめの未然対策等後手になった事案もあり、共通の認識で対応する必要性を感じた。また、SNSやオンラインゲームでのトラブルがいじめに発展するケースが急増し家庭内で起こった事象であるため正確な情報がつかめず対応に苦慮した。	・いじめに発展する要因の複雑化に対応するため、学校生活アンケートなど、児童の実態把握のよりきめ細やかな取り組みの推進 ・児童理解のための方策の実施と分析精度の向上 ・いじめ等の事案に対して迅速に対応できる組織の強化 ・情報モラル教育と保護者への啓蒙の推進 ・SOSが出しやすくなるような教育活動の推進
	人権教育を基盤として、多様性を認め合える豊かな人間形成に努めます	・LGBTQに対応した学習プラン等人権教育の推進 ・長期不登校を未然に防ぐための方策の推進 ・個別支援級の教育活動の充実 ・外国につながる児童に対しての支援の充実	LGBTQに対応した学習プラン(Fプラン)の見直しをし全学年で授業を行った。学習効果など継続して見ていく必要がある。不登校対策として、支援教育コーディネーターを中心とした教育相談室の活用など、環境面の整備により登校につながる児童が増えてきている。個別支援級では、個に応じた支援を行えるような環境を整えてきた。国際教室を中心として、日本語の取得に対しての支援をきめ細やかに行った。言語だけではなく、日本の文化や母国の文化など、相互理解につながる教育活動を推進できたことで、多くの児童が安心して学ぶことができた。	・Fプランを軸とした人権教育の見直しと推進 ・不登校対策としての相談室の役割の明確化と運営の推進 ・学習支援対策としての相談室の役割の明確化と運営の推進 ・個別級の12名の1年生に対しての支援の構築と人的配慮 ・国際教室の児童への、日本語支援の充実と文化面での理解の深化
	自分の良さを知る自己肯定感・自己有用感を育む教育活動を推進します	・一人一人の個性を伸ばしていく学級経営の推進 ・メタ認知する力を育む教育活動の推進	特別活動のねらいを明確にし資質能力を育む教育活動を展開した。子供たちが主体となる活動が年間を通して行うことができた。学級、学年の枠をこえたつながりがあることは、藤崎小の大きな強みである。今後も他者の思いを受け止め自己肯定感を育成する手立てを講じていきたい。	・一人一人が生き生きとした学校生活を送るために、特別活動を軸とした学級経営の充実 ・効果測定の結果についての分析の精度の向上と個に対する的確な対応
心身の健康と安全を守る力をつ	特別活動など主体的な活動を通し創造性と責任感を育成します	・児童が主役の特別活動の推進 ・情操を育むための異学年交流の推進	委員会活動やクラブ活動など、児童の主体性を大切にし、集団生活の中からよりよい人間関係を構築していけるような取り組みを推進した。異学年交流(仲良し班)では発達段階が異なる児童が年間を通し活動をしていく中から、リーダーシップや思いやりの心を育むことができた。この活動は藤崎小学校の児童の成長に大きく関与していると考えている。今後も継続していきたい。	・なかよし班を軸とした縦割り活動の充実 ・児童会活動やクラブ活動を通した主体性・創造性の育成 ・日々のクラス内での係活動や実行委員の活動を通した主体性と責任感の醸成
	他者との関わりや集団での活動を通し、自律する力を育みます	・他者との関わりの中で、善悪の判断をつける力を養う ・見出された問題に対し、自ら解決していこうとする意思の醸成 ・「藤っこのこころえ」がある理由についての理解の推進	学校が児童に示している「こころえ」について、「安全」「健康」「学習」を大切にしているため、ということ伝えてきた。やりたいことをそのまま行動に移すのではなく、思考し、時には我慢したりより良い方向を見出したりすることを促してきた。自律する心が育ってきている児童が増える中、未だ自分の感情を最優先し、善悪の判断ができなかったり突発的に問題行動を起こす児童が少なからずいる。	・自分自身の生活を安全に豊かなものにしていくためには、どうすればいいか思考する力の醸成 ・自身の言動について振り返るメタ認知能力の醸成

ける	防災・防犯・健康・栄養に関する教育の計画的に推進します	・防災マニュアルの見直しと定期的な訓練の推進 ・防災、防犯教育の充実 ・養護教諭、栄養士と連携したカリキュラムの構築 ・熱中症対策の徹底	学校環境の点検と修繕を日常的に行った。防災・防犯訓練を計画的に実行した。また総合的な学習の中で地域の防災について学ぶことができた。発災時刻や天候によって対応は変わる。想定を細分化し安全対策をとることが必要である。	・防犯、防災について、健康安全的行事の充実 ・防犯、防災について教科や総合的な学習との横断的な指導 ・特別活動(2)について養護教諭や栄養職員との連携の強化
地域と共に歩む	学校教育の成果や課題を保護者、地域と共有していきます	・学校のエデュケーション方針の提示 ・きめ細やかな情報の発信 ・教育相談体制の強化 ・学校教育アンケートの実施とフィードバック	教育方針など、学校便りやHP等で年間を通して発信した。支援教育コーディネーターや、養護教諭、栄養士もそれぞれの立場で学校が目指す教育について発信することができた。また、年間3回の個人面談を設定することで、情報共有の機会が増えた。しかし、学級懇談会になると参加率が激減する傾向がみられる。	・様々な立場からの学校教育活動と方針の発信 ・学年、学級懇談会の充実と参加促進の工夫
	地域環境や人材を生かしたカリキュラムを推進します	・学校運営協議会の推進 ・地域推進会議等への参画 ・地域教材や人材のカリキュラムへの取り込み	学校運営協議会では、学校教育の様々な場面の参観を通し貴重な意見をいただくことができた。今年度は職員との意見交流も行い、地域とともに進める学習が深化した。カリキュラムの中に地域環境や人材を生かしていこうとする意識が職員の中に高まりつつある。ただ、学年差があり、全体で底上げがされていないが課題である。	・6年間を見通した地域学習カリキュラムの構築 ・学校運営協議会の実効性のある推進
	地域の一員としての自覚をもち社会に貢献できる力を育てます	・地域の伝統文化への理解の推進と参加推奨 ・地域の防災体制への理解の推進と参加推奨 ・地域の福祉事業への理解と参加推進	70周年イヤーで、地域について調べたり、人と関わったりする機会が多く地域の一員としての自覚の萌芽がみられた。また地域のイベントなども積極的に子供たちに知らせ参加を促している。参加率はまだまだであるが、引き続き地域との連携を図っていきたい。地域教育会議の子ども会議へは、毎年代表の児童が参加しているが、そこで話された内容が全校にフィードバックされておらず、そこでの成果を生かし切れていないのが現状である。	・「大師節」など地域の伝統文化にかかわるカリキュラムの推進 ・「午祭り」など地域の伝統文化に対する理解と積極的な参加 ・地域教育会議への参加と、成果の全校への発信
働き方の推進		・校務組織の見直し等による効率化 ・勤務に対する意識の変革 ・教育効果を落とさず行える業務改善に向けた意見の集約 ・感染症や熱中症等の基準の更新と共通理解 ・校舎設備、教具等の日常点検の強化と効率化	教材研究の時間がないことには良い授業は行えない。教師が疲れていては児童のSOSに気づけない。働き方改革は、学校教育の質の高さの向上に直結した課題であると考えます。全職員で学校組織の見直しやICT活用による効率化を図ることができた。働き方に対する意識は変わってきてはいるが仕事量と勤務時間のバランスの悪さは否めない。教育公務員としての規範については折に触れ伝えられている。個人情報扱いを含め、各職員とも順守して勤務していた。教職員の人権意識についても、それぞれが振り返りを行った。自分と他者の感覚の違いについて、人権を軸に考え対応していくことの大切さを説き、人権意識を育てていきたい。	・代替えできる業務の洗い出しと効率化 ・見直しをもったカリキュラムの作成と、効果的な教材研究 ・時程変更について効果的な運用と裁定案 ・ICT環境を効果的に利用する校務改善 ・人権意識を高めていく取り組みの強化 ・個人情報取り扱いについての意識面、環境面の整備 ・教育公務員としての勤務の順守

学校関係者の評価

学校運営のまとめ

○保護者・児童アンケートより

- ・未知の状況に対応する力をつける(保護者92% 児童87%が肯定的)
- ・お互いの良さを認め合う(保護者89% 児童91%が肯定的)
- ・心身の健康と安全を守る力をつける(保護者93% 児童88%が肯定的)
- ・地域と共に歩む(保護者87% 児童80%が肯定的)

肯定的な回答が児童、保護者とも9割前後となっている。昨年度より「地域と共に歩む」項目のポイントが高くなっている。開校70周年にあたり、授業での関わりの増加が要因となっていると考える。また、学校で学んだことは将来役に立つと考えている児童が89%と高いポイントになっている。特記すべきは「とても思う」と感じている児童が78%いるといくことである。このことは学びの主体性とも直結しているものである。授業が学習指導要領の理念に沿ったものに変化してきた表れであると思う。いじめについての質問に対して、保護者の11%は否定的な意見であった。また、記述式においては「授業時数を増やしてほしい」「GIGA端末の使用を精査してほしい」「善悪の判断をしっかりつけられるよう指導してほしい」等の要望意見があり、学校教育報告の文書にて回答をした。

○学校保健委員会より

校舎が改築され、照度は十分に基準を満たしている。水道水の水質は問題がないがB棟は若干塩素濃度が低いこともあるため、飲水禁止としている。健康診断の結果に伴う治療については、受診率が大変低くなっている。様々な機会をとらえ受診を促していきたい。体格的にはやや肥満傾向の児童がいる。適切な運動と食事について促していくことが大切である。給食は献立によって残量に大きな差が見られる。栄養素のバランスについて授業を通してこれからも知らせていきたい。体育を学ぶ意味について、体育主任が話をし、思考していく大切にする取り組みについて評価をされた。

○学校運営協議会より

児童は大変落ち着いて学習に臨んでいる。また表情も明るく教員の日頃の取り組みの表れであると感じた。防災対策など、実際の訓練を通して、児童に根付いていることがわかった。児童の発言に「学校の良いところをみんなで意識しあって、さらに良い学校にしていきたい。」というものがあった。そのようになれるようにしていってほしい。いじめについて児童の関心は高いようだが、保護者はどう感じているか、個人差が大きい。大きな事案になる前に関係機関と積極的に連携をとっていつてもらいたい。地域の学校支援について、積極的に行ってほしい。要請があれば町内会を中心にチームをつくって対応していくので年間カリキュラムに組み入れてほしい。防災訓練は大切なことなので、今後も様々な状況を想定して取り組んでいったらいたい。

学校目標や重点目標を、児童の実態や変化していく時代に即したものにすべく、職員全体で検証を重ね、今年度の重点目標を更新した。「未知の状況に対応する力をつける」「お互いの良さを認め合う」「心身の健康と安全を守る力をつける」「地域と共に歩む」の4つの重点目標が運動しあい児童の生きる力をを生み出す「藤崎小学校学びの羅針盤2025」を掲げ教育活動を進めた。また周年行事で地域との連携を深めた一年間であった。

若手教員が多い本校にあって学習指導要領に記されている資質能力について理解していくことは今年度も急務であると考えた。「授業が変われば子どもも変わる」を合言葉に日々の授業改善に臨んできた。また国語・算数・社会・理科の研究を通し、「すべての児童を知的探求者」にすべく日々の実践を重ねてきた。また、事実の理解にとどまらない「概念としての理解」にも少しずつ焦点をあてた。数年後に予定されている学習指導要領の改定を視野に入れ、論点整理など文部科省から発出される文書にも積極的に目を通しように促してきた。また、本校の研究テーマでもある「探究」については、それがどのような姿をさすものなのか授業実践を通し具体的な児童の姿を通し明確にしていきたいと考える。GIGA端末の活用や対話的な学びなど、授業は確実に変化している。予測困難な時代を生きていく児童に必要な生きる力をこれからも育成していきたい。

児童の学校生活が安心できるものとなるよう、効果測定や学校生活アンケートなどを通して一人一人の声に耳を傾け、必要な場合は校内支援委員会で解決策等を話し合ってきた。児童アンケートでクラスにいじめがあるとした児童が一定数いる事実を真摯に受け止め、今後人権意識を高め「いじめは絶対に許さない」という姿勢を貫いていきたい。その基盤となるべき人権教育は不可欠であると考えている。LGBTQに関する内容を含め、発達段階を考慮した学習プラン(Fプラン)をさらに進化させた。不登校の児童に対しての取り組みも、相談室の効果的な活用も含め一人一人の学ぶ権利を保証していくという観点で引き続き取り組んでいきたい。障害や国籍などの違いを互い尊重し、必要な支援を受けながら共に学べる学校を目指し、個別支援級や国際級での教育を推進してきた。個別級では一人一人の課題に対応するには教師の人数が不足しているため人的加配を校内で工夫してきた。国際級においても日本語の習得の差が大きく、また話す言語も多様である。アセスメントを行いながら効果的な支援を模索してきた。よりきめ細やかな教育を行うために、行政への働きかけや、校内のカリキュラムマネジメント等に取り組んでいきたい。

本校の特色として異学年交流がある。様々な学年の友達との関わりの中から、社会に参画していく素地をつくっている。今後も児童の主体的な活動を大切にしながら、思いやりの心や憧れ、親しみ等健全な人間形成に向け様々な教育活動を展開してきた。また、学級活動やクラブ活動などを通して主体的に組織を作り、役割を自覚しながら活動していくことで、多様な他者と協働していく力を育んできた。社会の形成者としての基礎を作る活動としてこれからもこれらの取り組みを大切にしていきたい。

防災対策は様々な想定の下行っていく必要を強く感じる。学校は地震発生時の避難所になっている。津波に対する垂直避難訓練など、地域との連携も図る必要性を感じる。今年度総合的な学習の時間に地域の方々とのつながりが生まれた。学校運営協議会も始まり今まで以上に地域とのつながりを強固なものにし、開かれた学校を目指していきたい。